

---

# 王と精霊

山田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王と精霊

### 【Zマーク】

Z3361U

### 【作者名】

山田

### 【あらすじ】

風の国、サンセベリア。

前王が早くになくなつたため、一人息子であるフォルカ王子が若くして、王座についた。だが、彼は王族なら誰でも持つているものを所有していなかつた。

生まれた事に喜びを、皆に祝福を。

ああ、この国はなんて美しいのだろう。

私の国、サンセベリア。

\* \* \* \* \*

一人の騎士が豪奢な椅子に座る青年に声をかける。

「準備が整つたようです。覚悟はよろしいでしょうか。」

椅子に座つた男は笑う。

「もう疲れた。僕はいつでも覚悟していたよ。この時が来ることを。

」

窓の外を見る。

晴れた青空。窓を開け放しているため、時折ふわりと風が入つてくる。

男はその風を受け、気持ちよさそうに目を閉じた。

細めた目の色は緑、風に揺れる絹のような髪の色は淡い金色。整つた顔の青年だが、顔色が悪く、放つて置いたら消えてなくなってしまいそうな様子だった。

風の国、サンセベリア。

前王が早くになくなつたため、一人息子であるフォルカ王子が若くして、王座についた。

だが、彼は王族なら誰でも持つてているものを所有していなかつた。その事実をサンセベリア国の民は子供から大人まで皆知つてゐる。

\* \* \* \* \*

一人の旅人がある店に入る。

旅人はフードで顔を覆っているため、男か女か分からない。  
細身ですらりとした人物であることは分かる。

「いらっしゃいませ。」

少しほつちやりした店の女主人が愛想よく旅人を迎えた。

「よかつた。ここは開いていたのか。」

フードをとりながら、店の果物を物色する。

この旅人は背がすらりと高い女性だった。

髪は埃で少し汚れているが緑色の長い髪、瞳の色も深い緑色だった。

店主は顔を少しゆがませて。

「うちだつて閉めたいよ。でも、全部が全部閉めちまつたら、困る  
人が出るからね。」

旅人は首をかしげる。

「なんだ？ 祭りでもあるのか？」

「まあ。旅人さんには関係ないかもしませんがね。国に対してもス  
トライキつてやつですよ。」

町の店はほぼすべてCLOSEとなっていた。

「この国は平和でそこそこ豊かな国だと思うが。なにか不満でも？」  
「どうせすぐ耳に入るから言うけど、王が処刑されるらしいんだ。」

旅人は驚く。

「なぜ？ こんな立派な国なのに。」

店主は苦笑する。すると奥のほうから声が聞こえてきた。

「だろ？ なのに貴族のやつらが王の欠点をあげて、それを理由に国  
をのつとろうとしてるんだ。」

奥から出てきた男は視線を厳しくして通路に目を向ける。

「やつら騎士の連中もそれに賛同したらしい。」

馬に乗った騎士が警備のためか周囲を見回りながら進んでいる。

「やつらは金に屈したんだ。この弱虫どもめ！」

男が果物を騎士に向かつて投げつけたが、旅人がすばやい動作でその果物をうけ止める。

男と女主人はそのすばやい動作に目を見張った。

「こんなことしても、何にもならない。最悪、牢屋行きだ。」

男は苦いものを噛み潰した顔をして、奥へ戻っていく。

「あんた凄いねえ。ああ、そうだ。有難うよ。

危うく捕まるところだった。

ほら、これお礼。」

果物を数個、手渡してくれた。

その後、旅人は宿を探したがどこもかしこも閉まつていて、泊まれそうにない。

野宿でもいいかとあきらめかけた時。女の人気が蹲つているのが目に付いた。

「大丈夫ですか。」

声をかけると女性は教会の者だつたらしく、祈る姿勢で礼を述べられた。

「ええ。ちょっと眩暈がしていただけで。朝から広場で大きな声で抗議してたからかしら。疲れが出ちゃったのね。」

立とうとしたが、よろめいてしまう。

旅人は女性をささえ、抱きかかえる。いわゆる、お姫様抱っこというものだ。

「送りましょう。」

女性はびっくりして。

「あなた。本当に女の方？すごい力持ちなのね。」

旅人は苦笑して。

「旅をしてると自然とそれなります。」

だけど、しばらく町を離れすぎたようだ。

「ここまで、やつかいなことになつてているとは。」

抱きかかえられた女性はその言葉に涙を浮かべて数回頷く。

女性を教会に送ると、神父にたいそう感謝された。

「お礼にご飯でも食べていいませんか？」

自分のお腹が減っていることにその言葉で気付き、旅人は苦笑し。その申し出をありがたく受けた。

どうだ。と出されたものは質素なスープとパンのみだつたが、十分だ。

「ありがとうございます。」

スープに口をつける。

「旅人さん、どこかに泊まるといひは？」

「いえ。」

「でしような。どこも締め切つていますから。」

旅人は肩をすくめる。

「森で野宿をしようと思つていてる。」

神父は苦笑する。

「若い女性が、野宿なんてするものではありません。今日はここ泊まつてはどうでしようか？」

「いいのですか？」

「もちろん。私たち風の国サンセベリアは旅人を疎かにする事は良しとしておりませんから。」

夜になり、教会の片隅で寝る準備を整えていると、昼間に倒れていった女性が近寄ってきた。

「今、お話ししても良いでしようか。」

「ええ。体調は大丈夫？」

女性は赤らんだ頬を押さえる。

「運んでいただき、ありがとうございます。体力がないのに無理をするものではないと分かつてはいるのですが。」  
女性はごぶしを握つて力説する。

「今、立ち上がらないと、何かしないと。絶対後悔しますもの…」

「それで、城に向けて広場で抗議を？」

「ええ。貴族たちは王の欠点をあげて。王はこの国を守るために値しないと言つていいのですが。」

私はそうは思いません。」

「私もそう思う。この国をずっと旅しているが、王は良くやつていると思う。」

「…気になつていたんだが、欠点とは？」

女性はきょろきょろと周りを見渡す。

「王は精霊がおりません。精霊から貰つて、守護の紋章が体に刻まれていながらその証拠。」

旅人は目を見張る。

「守護の紋章がない…。」

「ええ。王族は生まれたときに自分の精霊も生まれ。その精霊から守護の紋章を貰い。守護の紋章の力で魔法を操り、精霊とともに国を守ることが出来る。」

女性はため息をつく。

「でも、国に攻めてきた魔物からちゃんと国民を守つてはいるし、生活だってそこそこ豊かなのよ。なのに王を処刑しようだなんて…！」

「それで、広場で抗議を？」

「ええ。捕まつてもいいと思つてるわ。」

「マリア。」

神父が女性を呼びにきたようだ。

「あら、少し話しそぎたみたい。旅人さん。いい夢を。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

神父も挨拶をしてきたので、それに返事をする。  
どうやら一人はこれからどこかへ出かけるようだ。

去り際の二人の顔を見ると、何かを決意したような真剣なまなざしをしていた。

何か重大なことが起こる前触れのよう。

このまま寝るわけには行かず、簡単な身支度を整えると、一人の後を追う。

夜の闇は濃く、明かりも無い町であれば、直ぐ目の前も見えぬほどだつたが

今は月明かりがあるため、一人を追うのは簡単だつた。  
どこか遠くまで行く訳ではない事は分かつていたが、ほんの10分ほど歩いた所で二人の歩みはとまる。

一人は回りも気にせず、一つの家の裏戸を叩く。

すると、中から一人の男が顔を出し、一人を戸の中に引き入れた。

神父が戸を閉めるときに、旅人はそれをとめる。

「これから何か、騒ぎでも起こそうと？」

神父はびっくりする。

扉のすぐ傍にいた男は旅人を見て直ぐに気づく。

「あんたは昼間の。」

戸の内側にいる仲間と思われる男たちは急なことで、びっくりして

直ぐに口を開くことが出来ない様子だ。

旅人は構わずと言つ。

「私も手伝わせてくれ。」

固まっていた戸の中にいた者達が訝しげにざわめきだす。  
すると、驚きから目が覚めたマリアが口を挟む。

「この方はいい人だから。大丈夫よ。それに力も強いの。」

昼間、騎士に向かつて果物を投げた男はうなづく。

「知ってる。ここじや話せない。入りな。」

家の中には20人ほどの男が集まつてた。

到底戦えそうに無いものたちであつたが、みな武装している。

「これから牢屋に侵入して、王様を助ける。」

「騎士がいるだろう？」

「だから、町で力の強い連中を集めたのさ。」

果物屋のおかみがいう。

確かに、力仕事は出来そつだが、騎士相手となると難しいだらう。

扉から出て、数分もしないうちに巡回の騎士と出くわす。

「なんだ。お前ら。夜にこんな人数で出歩いて。さつさと家に帰るんだ。」

見回り兵が5人。

町の男達は無言で、腰に下げた剣を抜く。

騎士達と町の男達に緊張が走る。

「・・・全員捕縛する。」

騎士達はすばやく剣を抜き、こちらに鋭い視線をよこす。

一人も逃がさぬように周りを取り込まれる。

町の男の一人が声を上げながら、騎士に切りかかるが、たやすく避けられる。

後に続く男たちもそつだ、誰一人として騎士と刃をかわすこともできない。

旅人が予想していたように、やはり普段から訓練されている騎士に

町の男達はかなわなかつた。

騎士は余裕だが、男たちは剣を振り回し汗だく、中には振りなれない剣を取り落とすものもいた。

旅人は一つ息を吐くと、参戦しようと剣を抜きつつ一步を踏み出す。他の男たちとは比べて、剣の抜き方構え方からして只者ではないと悟った騎士たちは

フードをかぶつた旅人を囲む。

一人の騎士が、様子見で剣を横に振るうと一瞬の間に旅人が姿を消した。

消えたと思われた旅人は上空に飛び上がり、空中でぐるりと一回転すると、一人の騎士の後ろへ着地する。

常人ではありえないぐらいの身の軽さ、着地する音さえもほぼ聞こえない。

背後を取られた騎士は旅人がどこへ消えたのか見えておらず、仲間の騎士を見渡すがこちらを啞然として見るだけで、何の反応もない。旅人は騎士の首元を、握っている剣の柄で殴り、あつけなく気絶させる。

騎士達が動きを止めている内に、2人目へ飛び掛る。

狙われた騎士はあわてながらも、旅人が繰り出してきた剣先を、少し震える手で持つ剣で2・3度受け止める。

その覚束ない手元に旅人は素早く回し蹴りを入れる事で騎士の剣を遠くへ飛ばす。

飛んでいった剣の行く先を目で追っていた騎士は旅人に殴られたのに気づかないまま意識がなくなっていた。

3人目が旅人へ切りかかったが、旅人は一瞬の間に懐へ入り、片手で襟元を掴み、引き寄せ、騎士を地面へ叩き付けた。起き上がる前に首元へ剣を当て、動きを止めさせる。

さて、次はと旅人が顔を上げる、その瞬間。

鈍い音とうめき声が聞こえたので、そちらをみると、完全に旅人へ意識を向けていた騎士たちに

町の男たちは後ろから物をぶつけたり覆いかぶさったりしていて、動きを封じ込めていた。

騎士達を縛り、柱にくくりつけた後、旅人は苦笑する。

「皆やればできるじゃないか。」

「無計画な男たちを見渡す。

「しかし。よく、牢屋まで行けると思えたな。」

「なりふりかまっぢやいられないんだよ。さあ、行こう。」

「旅人さんがいてくれてよかつた。」

旅人は一つため息をついた。

男達に案内された道順で目的地である牢塔に無事つくことが出来たのだが。

・・・はつきり言って、ほぼ正面突破。

要所要所で出くわす騎士達をありえないほど早い動きで対処する旅人。

本当にこの道でいいのかと何度も確認するが、これでいいのだと言う男達に旅人はあきれるしかない。

牢塔の内部にいた騎士もあつさり旅人が倒し気絶させる。

ここまでくる道のりで、旅人の戦う様を見た町の男達は、倒せて当然といわんばかりの様子。

旅人は少し訝然としない面持ちだったが、目的の牢屋についた為、意識を切り替える。

他より豪華な牢に王が中央で椅子に座つており、こちらを驚いた顔で見ていた。

町の男達は我先にと王と自分達を隔てている鉄格子にすがり付く。

「王様。助けにきました。」

「さあ、逃げましょ。」

「鍵はどこだ。探せ！」

王は氣を取り直すと立ち上がる。

「開ける必要はない。助かったところで、私には行く所も何もないのだから。」

旅人が一步前に出て

「私とともに旅に出よう。」

王は驚き旅人を凝視する。

他の者も賛同する。

「そうだ。そうするのがいい。」

王は皆を見渡し微笑む。

「ありがとうございます。だが、私は国を引き継ぐために殺されなければいけないと思つている。

王が生きているのに、次のものに国民は誰も目を向けはしないだろう。」

王の言葉に皆が騒ぎ出す。

「あたりまえです！」

「王様以外に誰が王様になるんですか。」

「誰もいませんよ！』

「ありがたいが、それではいけない。国が滅びてしまう。」

王の真剣さに騒いでいた全員が口を閉じる。

「さあ、皆家にもどれ。騎士が見回りに来てしまつ前に。」

「王様。」

尚も諦め切れない者が口を出そつとすると、王は笑顔でさえざる。

「ありがとう。嬉しかった。」

複数の騎士の歩く音が聞こえ、皆あわてて来た道を引き返す。ひとりの旅人を残して。

「今回の首謀者は誰だ。」

「聞いてどうする。」

「会つてくる。」

王は笑う。

「会えるか？宰相だぞ？」

旅人に目線を向けると、そこには誰もいなかつた。

王の部屋にたたずむ男一人。

顔は疲れきっている。

「胃が痛いな。」

「王を処刑するところの罪からか?」

男は驚いたように振り向く。

「誰だ。」

女はマントをはずし、不適に微笑む。

「私の名はサンセベリア。あなたが宰相?」

宰相は驚きかたまる。

女はもう一度聞く。

「一番豪勢な部屋にあなたがいるからそいつかと思つた。宰相ではないのなら、居場所を聞きたい。」

「・・私が、そうだ。私を殺しに、きたのか?」

女が腰に下げる劍を見る。

女はため息をつく。

「王がここにはいられないと言つ、それなら一緒に旅に出ようかと思つて誘つてみた。

が、断られてしまった。

無理やり連れて行つても追つ手がきそつだし。王の言ひことも一理ある。

なら、あなたをどけて、王を戻そつと思つ。」

淡々と言う女に宰相は冷や汗をかきつつ答える。

「王には守護の紋章があります。今回のことはまた起る可能性がありますが?」

あなたが守護を『えなからひになつた!』

女性は困つたよつに笑う。

宰相は焦りながらも、女を責めるよつ、指刺しながら強く言つ。

「サンセベリア。それは国の名であり、この国の王族につく精霊の名もある。」

女性、サンセベリアは苦い顔をする。

「守護の紋章は・・つけ忘れていただけだ。」

「は？」

「うつかりしていた。悪いと思っている。気付いて引き返そうと思つたんだが、城に留められそうで。でも、あなたがこんな行為を起こさなければ特に必要はないようこ思えたが。」

まずいと思つてゐるのか、下を向きつつ相手を攻める。それを聞いた宰相は、何かつき物が取れたかのように長いため息をつき、予想外のことと言つてきた。

「・・分かりました。そういうことなら私は身を引きます。ただし条件があります。」

「え。」

「國民の田の前で王に紋章を下さえてください。それが条件です。」

雲ひとつない青空。

広場には浮かない顔の人ばかり。

処刑日當日。

ざわめきの中、王が台へ上る。

すると一層、騒ぎが増したが、一つ大きな風が吹く。

良く通る宰相の声が聞こえた。

「上を。」

王が顔を上げると、緑の髪、緑の瞳を持つた一人の女性が目の前にふわりと降り立つた。

女性は王の頬に両手を当て、ゆっくりと額に一つキスをする。すると王と女性は一瞬、強い光に包まれ。

女性が目を開けて王の額を見ると守護の紋章が刻まれていた。

国民は喜び歓声を上げる。

王は目を見張り。

悲しそうな顔をして、女性の腕をつかむ。

「なぜ今頃・・・！」

「じめん。あなたと私が生まれたとき、国全体に知らせようと、祝福の風を起こして飛び回った。

生まれたことと、自由が嬉しくて嬉しくて。

そのまま風のように旅をしていた。」

王は精霊を抱きしめる。

精霊も王を抱き締めかえして続けて言う。

「でも、戦いのときは影ながら手助けしてたし。あなたの力だけでもこの国は大丈夫だつた。」

宰相は王と精霊の様子を見ながら事のはじまりの場面を思い出す。

\* \* \* \* \*

王が真剣な顔で宰相へ命令を出す。

「王を処刑することになったと噂を広める。」

「は？」

「そうすれば、精霊も出てくれる。」

「え。」

「もう、待つのはやめた。風のよつに動き回るやつを捕まえることは僕が囮になるしかないだろう。」

窓から入つてくる風を受けながら王は目を細める。

宰相は恐る恐る王へ尋ねる。

「もし、・・・本当にいなければ？」

「魔物と戦っているとき、幾度も風が助けてくれた。絶対に僕には

精霊がいる。」

自信にあふれた顔でにやりと笑つが、「でも」と言葉を続け下を向く。

「本当にいなきは、そのまま僕を処刑すればいい。」

宰相は飛び上がらんばかりに驚いた。焦つて王を説得する。

「そこまでする必要がどこに？ 戦いに手を貸してくれるのなら、あなたの力だけでも此の国はやっていけると思うのですが。」

\* \* \* \* \*

宰相と同じように事の始まりの口を済こ出した王は、精靈をもつ一度強く抱きしめ直して、言つた。

「国にじやない。僕に必要なんだ。」

「・・・」めん。今度から旅の合間にまわるよ。」

「鎖を！」

騎士が鎖を精靈の足にはめる。

王は極上の笑みを浮かべ、腕の中の精靈に笑いかける。

「あ。旅は終わりだ。風の精靈もあるが、お前は僕の精靈といふことを忘れていいむらしき。」

今日から離れることは許さない。

「わ、私を嵌めたな・・・！ 首謀者はお前か。」

「よひやくわかつたか。」

にやりと笑う王。

喜ぶ国民。

怒る精靈。

これは、王と精靈に振り回される、平和でまあまあ豊かで少し騒がしい国、サンセベリア国での有名なお話の始まりの一つ。 残りのお話はまたいつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3361u/>

---

王と精霊

2011年6月27日16時17分発行